

拾ったものは
大切に
しましょう

～子狼に気に入られた男の転移物語～

6

著 ぽん 監 TAPI岡

≫≫ ヒューゴ

イオリに拾われた奴隷の青年。二十の兄。

≫≫ ソル

入手した卵から生まれたフェニックスの雛。

≫≫ スコル

イオリに拾われた狼獣人の少年。双子の兄。

≫≫ イオリ

ゼンを助けたことで異世界に転移した青年。穏やかで礼儀正しいが、料理のことになると暴走しがち。

≫≫ ナギ

イオリに拾われたエルフの少年。特別な力を秘めている。

≫≫ アウラ

イオリに拾われたバトルホース。高い戦闘能力を持つ。

≫≫ パティ

イオリに拾われた狼獣人の少女。双子の妹。

≫≫ ゼン

イオリに拾われた狼。転移時に神獣フェニリスになった。体のサイズを自由に調整できる。

≫≫ ニナ

イオリに拾われた奴隷の幼女。ヒューゴの妹。

登場人物紹介

慣れたポーレットの街を離れ、魔道具職人の街アンティティラ、歴史ある古き港街ダグスクへと旅をしてきた相沢庵——イオリ。

自身の偽者と対峙し、ダグスク公爵領が抱えていた塩の利権問題を解決した彼は、待ちに待った観光へと乗り出した。

アンティティラの街で新しく仲間となったヒューゴ、そしてその妹のニナを交えての初めての街歩きは、山育ちで海に縁のなかったイオリを夢中にさせる。

それだけでなく、目新しい魚や貝には創作意欲を掻き立てられ、出来上がりを待つ子ども達もワクワクが止まらない。

そんな中、イオリはアーベル・グラトニーの息子で、ダグスクの街のグラトニー商会の支部長を務めるカイから売れもしない奇妙な食べ物を作り続ける、エナという老婆の存在を教えられる。

話を聞き、エナが作っているものが自分の探していた食べ物であることを期待し、イオリは入り江の端にある彼女の家を訪れた。

そこには鰹節や昆布、魚介類の干物など、イオリが探していた乾物の品々が沢山並んでいた。話を聞けばエナの家系が先祖代々守り続けてきた技術だという。

しかし、作り方は分かってても、長い歴史の中で使い方の知識が途絶えてしまっていた。

イオリが使い方を教えれば、エナは驚きながらも喜び、自分の先祖が神の愛し子であったことを伝える。

その後、イオリも神の愛し子なのだろうと言い当てたのだった。

自分の他に神の愛し子がいた歴史は知っていても身近に感じていなかったイオリは、その足跡をたどるため、ダグスクの街の小高い山にある教会に向かう。

そこで絶対神リユオンと再会したイオリは、かつての神の愛し子「十蔵」の壮絶な人生を聞いた。そして教会の横には、イオリも知る故郷の文字で十蔵の言葉が残されていた。

十蔵の思いに触れたイオリは、不撓不屈の精神を持ちながらも慎ましくダグスクの地で人生を終えた男の想いを胸に仕舞い、慣れ親しんだポーレットの街へ帰るのだった。

第1章 国王からの招待

1

「何!? 王都へ行く?」

「はい。王様から召喚状が届いていたらしいんです。それを利用して、登城しようかなって。ついでにテオさんの護衛依頼を受けました」

イオリが夕飯の席で家族に説明すると、子ども達は喜び、ヒューゴは驚いた。

「そういえば、ヒューゴさんは都合悪いですか?」

「俺が貴族だったことを知っている者がいてもおかしくないが……。15で家を飛び出してから、家とは関係なく生きてきたからな。風貌も違うし気付かれないんじゃないか? しかし、愚父の悪行は有名なしいから、面倒に巻き込まれる可能性もある。俺はイオリが行くならついていくが、迷惑をかけるかもしれないぞ?」

ヒューゴが眉間にしわを寄せて話すのを聞くと、イオリは頷いた。

「迷惑は良いんです。嫌じゃないなら、行きましょう。折角です。みんなも王都を楽しもうよ」

「……やったー!」

その日、子ども達は「王都ってどんな所?」「王城は?」「王様ってどんな人だろう?」と想像しながら眠りについた。

イオリ達が商人ギルドのギルドマスター、ゲーザと会ったのは2日後のことだった。

場所は、グラトニー商会にあるホワイトキャビン——その代表であるバートの仕事場だった。

一足先に現れたゲーザとサブマスのヘミング、そしてゲーザの秘書をしているジェイミーは、バートの机に高く積み上げられた書類に目を奪われていた。

「忙しいところにお邪魔して、申し訳ないね」

「いいえ。狭くてすみません。どうぞお座りください。イオリさんもしばらくいたらいらっしゃると思いますから」

ゲーザとバートの挨拶が終わると、側にいたバートの同僚のハンスがそれぞれに紅茶と茶菓子を出した。

「ところで、バートさん。イオリ様はどんなお方です? お若いっていうのは知っていますが……」サブマスのヘミングは窺うようにバートに聞いた。

「そうですね……。気さくな人ですよ。でも、隠しきれない聡明さをお持ちです。大叔父が一目で気に入って力になりたいと言いつ出したんですから、凄いでしょ?」

膝の上で手を組むバートはニコニコとしていた。

「しかし、最近のグラトニー商会の盛り上がり陰にSランク冒険者がいるとはね……」

ゲーザは嫌味っぽく、そう呟いた。

それを聞いたバートは、ニコニコ笑って首を横に振った。

「いやー。報告してませんでした? グラトニー商会とホワイトキャビンは、完全に切り離されているんですよ。場所は借りてますんで、賃貸料も払っていますし、グラトニー商会がホワイトキャビンの商品を扱う時は購入してもらってますよ。恩恵どころか、未だお荷物の状態です」

ゲーザがそれはないだろう! と思わず声に出そうとした時だった。

廊下の方から賑やかな声がしたかと思えば、扉がノックされ、支部長であるブルーノが顔を出した。

「イオリ様がご到着です。大旦那様も同席されるそうなので、ご案内いたします」

そう言うと、扉が大きく開かれアーベル・グラトニーと青年2人、そして白い狼が1匹入ってきた。

金髪の青年は壁際にいるハンスの隣に立ち、黒髪の青年はアーベルについていきニコリと会釈をした。

「初めまして! 商人ギルドのギルマスのゲーザさんと、サブマスのヘミングさん。それから、秘書さんのジェイミーさんですね? イオリです。ご足労いただきありがとうございます。お話があるとか? どうぞ、何でも聞いてください」

出端を挫かれたように戸惑った3人は、この若い青年の青い瞳がギラついているのに気付いていなかった。

自分達が冒険者の罠にかかったと知ったのは随分とあとのことだった……。

「はっ、初めてお目にかかります。私は商人ギルドのギルドマスター、ゲーザ。こちらから、サブマスターのヘミング。そして、私の秘書のジェイミーです。本日はイオリ様とお会い出来て嬉しく存じます。随分前からお願いをしていたのですが、何かとご都合が悪かったらしく……」

そう言うと、ゲーザは恨みがましく、澄まし顔のアーベルを見た。

「それは、すみません。基本は冒険者ですので、依頼をこなしたりして……。先日まで旅に出ていて、忙しくしておりました。ホワイトキャビンはバートさんに全てお任せしましたので、俺の出る幕はないと思っていたんですよ」

イオリの言葉にゲーザはにこやかに頷いた。

「そうでしたか、それはお忙しいのにお時間を作っていただいて申し訳ない。早速ですが、お話を聞かせていただいても構いませんか？」

「もちろん。どんなことでしょう？」

ゲーザはジェイミーから紙を受け取ると、準備してきた質問を始めた。

「イオリ様が素晴らしい商品を生み出しているのは存じております。しかし、商人ギルドに登録されてませんが、どうしてでしょう？」

「俺は冒険者です。生活の資本は冒険者の活動で十分です」

そう言うイオリに3人は驚いた顔をした。

「では、全ての権利をグラトニー商会に渡しているということですか？」

「いいえ。グラトニー商会にはお手伝いいただいています。が、権利は俺のものです。グラトニー商会から独立したホワイトキャビンに、権利の管理をしてもらっているんです」

単純明快に答えるイオリに、3人は何とも言えない顔をした。

「それでは、グラトニー商会が出したお店は？」

「菓子店とシチューをはじめとしたレストランですね？ 菓子は、砂糖とレシピを買っていただいています。シチューの店は、元々牧場の一家のものです。俺はレシピを売っただけ。グラトニー商会は投資しただけ。繁盛しているのは牧場一家の努力の賜物です」

これまた、ぐうの音も出ない説明に、ゲーザはイライラとしてきた。

「そうであるならば、やはり貴方は商人ギルドに登録するべきではないですか!? 儲けた分の税金だつて発生するわけです。我々にはそれらを管理する義務があります」

「工房の職人は全て商人ギルドに登録するのですか？ しないって聞きましたけど？」

「えっ……？」

「オーナーじゃなくても、職人が新商品を開発することもあるでしょう？ それが出来るって聞いたから、今の形態にしているんですよ。それに儲けに税金は付き物ですが、我々にとっては意味が

「ないです」

「なぜです??」

ゲーザは戸惑う気持ちを抑えて、極めて冷静に話しているつもりだった。

「売り上げの全てをポーレットという街に還元しているからです。ホワイトキャビンは公共事業の一端を担っているんですよ。確か、ご説明したと報告を受けましたけど?」

「してますよ」

イオリの問いにバートは飄々^{ひょうた}と答えた。

「俺のレシピはある程度、商人ギルドに登録しています。その分の利益に伴う手数料はお支払いしてますよね?」

「ええ……まあ。ジェイミー?」

「はい。お支払い頂いています。しかし、その全てを街に還元とは? ポーレット公爵家にお金が流れているってことですか?」

鋭い目をしたジェイミーを見て、イオリは首を横に振った。

「正確には違います。ポーレット公爵家が行っている奴隷廃止に感銘を受けて、それに協力しているんです。ポーレット公爵家の畑からの儲けは、働く人の給料や、教会の教育機関で学ぶ子ども達の助成金として利用されているのはご存知ですよ? それの手助けをしているんです。余ったお金は街を囲む壁の補修などに使われていますよ。これが、街に還元する公共事業の仕組みです」

「それでは、貴方がたに何の得もないじゃないですか……」

ジェイミーは理解し難いと顔をしかめた。

「それは商売人さん達の考えですよ? でも俺は冒険者です。冒険者の仕事で食っていきます。Sランクなんです。それ以外のお金なんて使いきれませんよ。だったら、好きに使います。俺はポーレットという街に投資しているんです。奴隷がいけないというのは人道的にも素晴らしいですが、商人的にも良い傾向だと思いますよ?」

「良い傾向?」

今度はサブマスのヘミングが興味深そうな顔で聞いてきた。

「商人にとって奴隷を買うというのは、つまりコストです。使える人材を探し当てるまでに多額のお金を使いますし、購入したらしたで生活費などの出費があるわけです。公爵家が行っている政策はただ、奴隷をなくそうとしているのではなく、彼らの自立を目指しています。ということは、スキルを持った人材が育ち、商人達は見合った額で雇えるわけです! グラトニー商会在手伝ってくれる要因の1つはそこです。良い人材が育っているんですよ。この街は!!」

唸る3人をよそにイオリの演説は止まらない。

「人材育成が行われれば、どうなります? 美味しいレストランが軒並み出来て、良い職人が集まれば? よその街から観光などで人が集まりますよ! それはつまり、それぞれの商会在底上げされるということです。商会同士で争ってる場合ではありませんよ? 街をあげて、成長するべき時

です。商人ギルドの存在意義が発揮される時じゃないですか!!」

「「なるほど……」」

イオリの熱弁に気圧^{けお}されている商人ギルドの3人を、アーベル、バート、そして壁際に立っていたハンス、ヒューゴ、ブルーノはニヤニヤしながら見ていた。

終始イオリのペースで進んでいく話し合いに、ミーアキャットのようにシンクロして頷く商人ギルドの3人は圧倒されている。

「流石イオリ様ですね。丁寧かつ簡潔に話を進めておられる。あれではギルマスも頷かずにはいられませんでしょうね」

「そうなんですか？ 俺にはイオリが詐欺師^{さぎ}のように見えますけどね。にしても、あんなに信じやすくて大丈夫なんですか？ 商人ギルドのトップでしょう？」

壁に寄りかかるハンスとヒューゴはヒソヒソと会話しながら苦笑していた。

それを聞いて、ブルーノが諭^{さと}すように言った。

「お客様に聞こえますよ。大体、あの3人がただの人でないことくらい分かることでしょう。しかし、イオリ様は嘘もなく素直にお話しになるので、納得せざるを得ないんですよ。あとはイオリ様のお人柄でしょうね。相手の話を聞いた上で、ご自分の意見を押しつけてらっしゃる。本当に商人になつたら恐ろしく長^たけた営業をなさるでしょうね」

話題にされていることに気が付かないイオリは、結論を口にする。

「そんなわけで、砂糖の利益に関しては譲れません。その代わり、ポーレットの景気拡大のために還元していきますので了承していただけませんか？」

「なるほど、なるほど。長年商人をしておりましたが、イオリ様のような考え方に触れたのは初めてです。とても興味深く拝聴しました。アーベル様も同じようにイオリ様のお話を？」

イオリの話を聞き終わったゲーザは、アーベルに視線を動かした。

「私は、ポーレット公爵から面白い物を見に来ないかと言われた隠居者だよ。確かに、イオリ君の話は儲け主義の現役商人達はむず痒^{かゆ}く聞こえるだろうが、街全体の底上げなどかつてあっただろうか？ 誰しもが足を引っ張り合う世界でこんなに愉快な話はない。それをポーレットでやってみたら良い。今までもイオリ君は商売に関わりたくないとおっしゃっていた。なら、この仕事は我らの話だ。どうだい？ この話に乗ってみないか？」

前のめりになって話すアーベルに、ギルマスのゲーザはニヤリとして手を出した。

「やりましょう。王都よりも素晴らしい仕組みをポーレットから……。こんな痛快な話は聞きません。そうとなれば、公爵様のお話も聞かないと！」

「それなら、私が聞きましょう」

軽いノックをして入ってきたのはニコライの従者、エドガーだった。

エドガーは同じ従者のフランよりもより実務向きな思考の持ち主で、法律にも精通している。

「ポーレット公爵より、話は承^{うけたまわ}っています。それに、イオリさんの考えには現当主のテオルドも、

次期当主のニコライも感銘を受けています。2代にわたり、改革に前向きな今、話を進めるべきです。商人ギルドも手を貸してくれるのなら話は早い。早速、進めましょう」

エドガーの出現により、トントンの拍子に進む話し合いが一段落したタイミングで、イオリはニコニコしながらソファアを立った。

「もう良いですかね？」

アーベルに耳打ちすると、彼はニツコリと頷いた。

「じゃあ、子ども達のいる部屋に行っています」

ヒューゴとゼンを連れて廊下に出ると、イオリはヘナヘナと座り込み大きな息を吐いた。

「はあああああ。疲れたあああああ」

「ふふ。お疲れさん。ブルーノさんとハンスさんが褒めてたぞ。良い商人になれるってさ」

「勘弁してくださいよ。1回の話し合いでこんなに疲れるのなら、ごめんです」

ケラケラ笑うヒューゴを背に子ども達の待つ部屋に入ると、お腹いっぱいにお菓子を食べたのか、彼らは思い思いの格好で眠っていた。その姿を見て、イオリとヒューゴは笑うのだった。

△ △ △

商人ギルドからの呼び出しを受けた日から2日後。

この日は約束通り、ダゲスクから持ち帰った乾物のお披露目会を行うため、イオリは公爵家のキッチンを借りてスコルと公爵家の料理人と共に料理に勤しんでいた。

「ふむふむ。昆布は沸騰させない……。鰹節は弱火でしばらく煮てから火を止める……」

「煮干しは内臓を取って一晩置く……。ひじきも水に戻す。なるほど……野菜でも出来るな」

「蒸す……そんな調理法があったとは……流石イオリ様」

「もち米？ ……米にも種類があるのか」

ポーレット公爵家の専属料理人達は1つも漏らしてなるものかと、イオリに教えを乞うていた。

「——って感じで出汁は取っていきます。料理によってブレンドしちゃうのも良いと思いますよ。

家庭によって味が異なったりしますし」

「『なるほど、なるほど』」

理解したのかしないのか、料理人達は呆けるようにイオリの一手一投足を見つめていた。

「じゃあ、その出汁を使っていきますよ。スコルは卵ね」

「はい！」

手を上げてニツコリ笑うと、スコルは卵を何個も割り、混ぜ始めた。

「あれは何を？」

「出汁巻き卵といって、卵と出汁を混ぜ合わせて作る卵焼きですよ。スコルもすぐ出来るようになったんで、皆さんも試してみてください」

そう言うと、イオリは小さな四角いフライパンを渡した。

「これは……」

「出汁巻き卵を作る時に便利なんですよ。カサドさんに作ってもらいました。ほら！ あんな感じに!!」

イオリが指差す方を見ると、スコルが上手に膝と腰、そして手首を使ってフライパンを片手に卵を巻いていた。

「ほっほっほい！ 出来た！ イオリ出来たよ!!」

ニッコリ笑うスコルに親指を立ててみせると、イオリは自分も調理にとりかかった。

「良い匂い！」

パティが嬉しそうにキッチンに向かおうとするのをヒューゴが止めた。

「ストロップ!! 今日は、イオリが乾物の魅力を公爵様やアーベル様に教える日だからな。もうちよつと待つてよう。あとでみんな一緒に食べるんだ」

「うーん……。うん！ 待つてる！」

素直なパティはすぐに納得すると、本を読んでいるナギと二ナの元に戻り、一緒になつて本を読み始めた。

「パティの集中力は長くは保たないな。何か考えないと……」

ヒューゴと共に子守をしていたアウラが頷いた。

そんな心配をよそに、ゼンとソルは風通しのいい場所を見つけて目をつぶっていた。

「まあまあまあ、みんな大人しくここにいたの？ 暇なら私と一緒に王都の王妃様へのお土産みやげを考えない？」

その時、顔を覗かせたオルガが飽きているであろうパティを見て声をかけてくれたのだった。

「パティ、考える!! 王妃様ってどんな人？ イオリがね、贈り物は相手のことを一生懸命考えて選ぶなさいって」

「まあ、素敵な考えね。私も同じようにするわね。そうねー。王妃様はお優しく、笑顔が素敵だわ。あら、パティちゃんと二ナちゃんも素敵な笑顔ね」

そう言つて、プニプニと二人の頬を突くオルガにヒューゴは頭を下げた。

パティと二ナはくすぐったそうにクスクスと笑うと、一緒になつて考え始めた。

「パティはコカトリスのお肉が良いと思うよ。何の料理にも使えるもん」

「二ナもー」

華やかな生活とは無縁な少女達は、「腹を満たすことに限る」と間違つた教育を受けているために、色気のないものを提案する。

「そうね。良い考えだわ！ 美味しいものね」

（良い考えなのか!?）

声に出さずに驚くヒューゴを見て、筆頭侍女のモーナは静かに首を横に振った。

2

「さーて、お揃いのようですので始めましょうか」

ニコニコとご機嫌なイオリが立つのは、晚餐用の長いテーブルの正面だった。

揃ったのは公爵家の面々に、グラトニー商会からアーベルとブルーノ、ハンス、そしてバートだ。
「俺が海の街で手に入れたかったのはコレです」

ゴンツとテーブルに出したのは鯉節だ。

しかし、分からね者達には硬い流木にしか見えないだろう。

案の定、訝しげな顔をしている面々を見てイオリはニヤリとした。

「カツオという魚を特殊に加工して作られているんです。『鯉節』と言います。削ったものを載せた一品をお出ししますね」

イオリの合図と共に、ポーレット公爵家の筆頭執事——クリストフや筆頭侍女——モーナをはじめとしたメイド達がそれぞれの前に料理を差し出した。

「大豆を煮て固めた物です。上に載っているのが、先ほどの鯉節です。オクラというネバツとした

野菜と一緒にどうぞ」

スプーンを使いながら食べる公爵——テオルドは、微笑みながら小さく頷いた。

「鯉節の香りが抜群に食欲をそそるな。下にあるのは何だ？ プリンに似てる」

ニコライの疑問にイオリは答えた。

「豆腐と言います。大豆すり潰して煮ます。それに海水から取り出したニガリという液体を混ぜることで固まるんです。大豆の風味もいいでしょう？ 良質な大豆を使っているからです。鯉節の良さをシンプルに感じてもらうために作ってみました」

概ね好評だった豆腐が終わると、イオリはクリストフに合図を送った。

「次は俺の故郷では『八寸』と呼ばれる物です。1つの箱の中に季節を盛り込みます。旬の食材と盛り付けで、見ても楽しい、食べても美味しいを表現するんです」

皆が楽しみに待っていると浅い木箱が置かれる。

中は色とりどりの植物と共に美味しそうな料理が飾られていた。

「まあ、綺麗……」

「うむ。美しい」

「食べるのもったいないね」

感嘆の声を出すオルガを皮切りにアーベルやパティも感想を口にする。

キノコを焼いた物や、葉野菜のお浸し、川魚の香草蒸しなど、少量の料理が沢山散りばめられて

いる。

それらは綺麗な葉やハーブで彩られていた。

「旬の食材は魔の森で思つて採ってきました。箱の中を魔の森の花畑にしたんです」

「とっても美しいわ！　こんなの見たことないもの！」

大満足のオルガに会釈すると、イオリはクリストフに小さなグラスを配ってもらった。

「俺が手に入れたお酒です。この料理には合うと思いますよ。子ども達のグラスには果実水が入ってるよ。試してみて」

早速口にとると、子ども達はもちろん大人達が大喜び。

「美味い！　あの酒だろ！　もっとないのか？」

何度か飲んだことのあるマルクルに、イオリは首を横に振った。

「魔の森でも俺の住んでいたところでしょうか手に入りませんよ。量はないんです。それに、酒が多過ぎると舌が鈍りますから」

「確かに……。しかし、こんな美酒は他に飲んだことがない。残念だ……」

シュンとしている大人達を見て、イオリは「やっぱり、お酒が湧き出る魔法の水筒のことは黙ってしよう」と誓うのだった。

そんな大人達を見て、クリストフは早めに次の準備を始めた。

「このスープの香りは……」

新たな皿を受け取ったブルーノが、恍惚とした顔を浮かべて匂いを嗅いだ。

それに釣られるようにバートも鼻に皿を近づけた。

「先ほどの鯉節とは別の干し魚から取った出汁をベースにスープを作りました。余計な物が入っていない、海の恵みの味です」

それから、スープを飲み終わるまで本当に静かな時間だった。

1人1人が美味しそうに喉を潤わせる。

「なんて素晴らしいスープだ。以前、肉と野菜でとったスープをイオリが作った時も驚いたが、その時の物とも全く違う澄んだ味だ。見事だ」

テオルドの言葉に同意するかにようにアーベルも微笑んだ。

「何度もダグスクへは行ったことがあったのに、この魅力を知らなかったなんて惜しいことをしました」

「是非、エナさん一家を褒めてあげてください。ずっとこの技法を守ってきたんです」

アーベルはスープがなくなった皿を見つめ真剣に頷いた。

ここまでの反応は悪くない。

みんな満足そうに食べている。

そう考えながら、イオリはクリストフと共に新しい皿を並べていった。

「次は煮物を用意しました。海物はひじきと言って海藻なんです。黒いですけど、美味しいです

よ。先ほどお出ししたカツオの出汁も使われています。もう1品は山の幸として角煮を用意しました。海と山、調味料は似ているのに全然違うんです」

好物の角煮が出されて嬉しそうにしていたヴァルトは、隣の皿に盛られた料理に驚いた。

「本当に真つ黒だな。大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ。美味しいんですって。ヒジキの方が味が優しいので、先に食べることをお勧めします」

躊躇するヴァルトを笑いながら、ニコライはヒジキをスプーンですくって食べた。

「イオリが出て不味かったことなんてなかっただろう。……うま、美味しいな！ これはこれで良いぞ」

ヒジキという見たこともなかった物を、ニコライはいたく気に入ったようだった。

「兄上が言うのなら……美味しい……。これが海の幸か」

「と言っても、ダグスクの皆さんも食べてませんでしたけどね。もったいない」

イオリの寂しそうな表情を見て、テオルドは優しい声で言った。

「今回の出会で乾物の美味しさを皆が知れば、広まっていくだろう。その一家にも礼を言わないといけないな」

イオリは嬉しそうに頷いた。

「かわいい」

小さな二ナが覗き込んだのは、お皿の上に載った茶色い袋の中に、色とりどりに盛り付けられた料理だった。

「これはお稲荷さんって言うんです。最初に出した豆腐を薄く切って油で揚げた物を出汁や醤油、砂糖で味付けしてあります。その中にはお米が入っています。卵とハーブを盛り付けに使いました。召し上がれ」

小さいお稲荷さんを頬張る二ナは満面の笑みで喜んだ。

「おいしい！ 二ナこれ好き」

「ナギも！ 甘くてしょっぱくて……おいしい!!」

子どもに人気のお稲荷さんは大人にも好評だった。

何よりも同じ素材が調理法でここまで変わるのが興味深いらしい。
グラトニーの4人は何やら相談しながら楽しそうだった。

「お腹に空きはありますか？ これからもっと出ますよ？」

そう言うと、イオリは焼き物として鶏肉のクルミ味噌焼き、蒸し物として茶碗蒸し、揚げ物として野菜と山菜の天ぷらを出した。

「海の食材は現地で食べるのが美味しいですけど、ここには山の恵みがあります。クルミ味噌も香ばしくて良い働きをしてくれますし、茶碗蒸しは出汁と卵を楽しむ物です。野菜と山菜はポールレットと魔の森で手に入れましたが、塩とつけ汁はダグスクで手に入れたものです」

イオリの説明など気にするでもなしに、子ども達は頬を膨らませてモグモグと食べている。それを横目にテオルドが口を開く。

「私もダグスクへは行ったことがあるが、まさかこんな料理が出てくるとは思わなかったぞ。全てにおいて見事だった。乾物か……。アーベル。この品を取引はせんのか？」

「使い方を知らないと流行りませんでしような。やはり、店が出すのが一番でしょう。これはイオリさんのお作りになった物でないとすると、グラトニーが直接動けます。すでにダグスクの方で動いているようなので確認いたしましょう。この歳で新たな味に出会えるのは素晴らしいことです」

その後は、炊き込みご飯とお味噌汁、最後に甘味である寒天ゼリーを出して終わった。

寒天ゼリーは子ども達に大人気で、冷蔵庫があると美味しくなると力説すると、再びテオルドはアーベルと物流についての話を始めてしまった。

無言で食べ続けたポーレット公爵家の兄弟と従者達は、お腹がはち切れんばかりにおかわりを頼んだとか……。

何はともあれ、イオリの「エナばあちゃんの乾物を流行らせよう」という企みは、良いスタートを切った。

△ △ △

その後、ポーレット公爵家ではダグスクの乾物ブームが起こり、料理人達も毎日のように出汁を取ると新しいメニューに挑んでいた。

「グラトニー商会も、ダグスクから乾物を取り寄せるって張り切ってるみたいだぞ」

「それは良いですね。あちらも今は忙しいでしょうが、お孫さんのデイスさんがやる気に満ちていたので、追々取引を開始出来るでしょうね」

ヴァルトは朝の執務を終え、新たな仕事から避難しにイオリの元にやってきていた。

イオリは、ヴァルトの話を聞きながら何やら木を細く削っていた。

「さっきからお前は何をしてるんだ？」

「これですか？ 蒸し料理に便利な蒸籠せいろうっていう調理器具を作ってるんですよ」

「蒸し料理って、この間の茶碗蒸しか！」

ヴァルトは目を輝かせて言った。

「そうですね。この間のは鍋に木枠をはめて簡易的に作りましたが、蒸籠があれば便利だと思って作ってみてみるんですよ」

「そうか！ 楽しみだな!! 簡単に出来るのか？」

「んー。一度、じーちゃんが手直ししてるの見たことあるんで、見よう見まねで作ってみます」

「やはり、イオリのお爺様おじいは天才だな」

イオリは嬉しそうに頷くと笑った。

「餅米^{もちいめ}も手に入っただんで色々と試せたら良いですね」

その後、トゥーレに見つかり捕獲されるまで、ヴァルトはイオリと共にくつろいでいた。引きずられていくヴァルトに手を振ると、イオリは作業に戻る。

「四角い方が作りやすいけど、四角い鍋がないし……。今度カサドさんに作ってもらおう。今日は丸に挑戦だな」

子ども達とヒューゴが修行や勉強をしている間に、イオリはコツコツと道具の製作に取りかかっていたのであった。

△ △ △

一方その頃、公爵家の執務室では、テオルドと従者のノアが話し合っていた。

「兄上から連絡が来たぞ。1ヶ月後に王妃の茶会を催すことになった。それに伴い登城せよとのことだ。イオリに会えるのを楽しみにしているそうだ」

「1ヶ月後ですか。早速、準備いたします。今回はどなたがご出席で？」

「タヴァロス侯爵が絡んでいるんだ。ニコライが必要だろう？　しかし……。うん。全員で行こう。クリストフに負担をかけるが、ヴァルトにはイオリのサポートを頼まなければならない」

ポーレット公爵のテオルドと従者のノアは、来たる1ヶ月後に備え始めた。

「ふふん。兄上もイオリを気に入るだろうけどな。イオリはポーレットを気に入っておる。取られることもなからう」

「……それが本心か。傲慢も大概にしろ……」

主人であるテオルドに冷たい目を向けるノアであった。

△ △ △

そんなことを知らないイオリは、1人ニヤニヤと笑みを浮かべていた。

「餅米だからお餅もいいけど、中華まきも食べたいんだよね……。やばい。想像して手が止まっていた」

『何それ！　何それ！　美味しいの？』

イオリの呆ける顔を見て、興奮したゼンは嬉しそうに抱きついた。

「うん。俺の大好物。蒸籠がうまくいったら作るね」

『ピヤッホー。ソル！　美味しいんだって。チューア・チマチ、あとでパティにも教えよう！　きつとだよ!!』

再びソルと戯れるゼンにイオリは微笑み、作業に戻っていった。

△ △ △

カサドに装備の注文をしてから2週間が経った日。

イオリ達は昼を過ぎた時間にカサドの工房の扉を叩いた。

「カーサードーさん!!」

子ども達の声が響くと、ぎーっと扉が力なく開いた。

「おお。来たか。入れ」

どう見てもお疲れモードなカサドに、心配そうにイオリは声をかけた。

「また、無理してくれたんですか？」

「いや。作り始めると色々とアイディアが湧いてな。試してたら、こんな感じになっちゃった。気に入んな。奥に用意してる」

カサドのあとをついて作業場に足を踏み入れると、イオリ達は思わず声を上げた。

「うわー。カッコいい」

「うん！ これ、ヒューゴのでしょ？ カッコイイ！」

「パティもそう思う！ 絶対に合うよ！」

「ナギも！」

「とりあえず、着てみてくれ。最後の調整をする」

目の前のものが自分用の防具と知って戸惑うヒューゴは、カサドに連れられ試着室に入ってしまった。

「ちびっ子嬢ちゃんのはこっちだ。パティ、手伝ってやれ」

「はーい！ 行こう、ニナ」

パティと手を繋いで試着室に向かうニナに手を振ると、イオリはスコルとナギとソファーに腰掛けた。

最初に出てきたのはヒューゴだった。

「おお。良いな！ よし、苦しいとこはないか？」

「ないです……。これ本当に俺が着ていいんですか？」

カサドとイオリの顔を交互に見ると、ヒューゴは照れたように頬をかいた。

「お前さんにピッタリに作ったんだ。お前さん以外に誰が着るんだよ」

カサドに背中をバシッと叩かれながらイオリの元にやってきたヒューゴの防具は、キャメルのベストにグレーのワイシャツとズボン、そしてブーツ。上からキャメルのコートを羽織っていた。

「似合ってますよ。動きづらいとかないですか？」

「ない。どちらかと言うと、服に近いな。防御面は大丈夫ですか？」

「ああ、通常の戦闘なら問題ない。色々と効果を付与しているからな。双子との連携が大事って

聞いたから動きやすさを優先した。防御を優先する際はもつと重いのが良いと思って、別のやつも作った。この指輪を嵌めてみる」

ヒューゴが出された金の指輪を嵌め、カサドに指示される通りに触ると、一瞬で全身が真っ黒な甲冑姿になった。

「なっ！」

「凄い！」

「びっくりした……」

イオリ達が驚く中、当の本人が一番驚いたように立ち尽くしていた。

「頭からつま先まで、ウルツアライトっていう火山でしか採れない鉱石で作ってある。硬くて重みがあるが、その分防御力は高い。お前さんのシールドのスキルと合わせれば、防御力は格段に上がる。ただな、その都度、着替えるわけにいかんだろう？ だから、指輪にイベントリの機能を組み合わせて好きな時に着替えられるように細工しといた」

「そんなことが出来るんですか？」

驚いたヒューゴが再び指輪に触れると、元の防具に戻った。

「それを思いついたのがイオリ達が旅に行ってからだ。試行錯誤して完成させた。お前らの全部そうしてるからな」

テーブルの横には指輪が並べられていた。

「おお！ ありがとうございます！ めちゃくちゃ便利じゃないですか！ 流石名工！」

イオリは真っ黒な指輪を手を微笑んだ。

スコルは青、パティは赤、ナギは緑、ニナはピンク。

それぞれが綺麗な光を放っていた。

「説明は後だ。とりあえずヒューゴはいいとして、ちびっ子嬢ちゃんはどうだい？」

試着室に声をかけると、パティが紅潮した顔で出てきた。

「すごい可愛い！ あっ、ヒューゴとお揃いだ」

そう話すパティの後ろからテトテト出てきたニナは、キャメルのベストにグレーのワイシャツ、キュロットスカートにブーツ。そして、薄ピンクのフード付きケープを身につけていた。

「「可愛い!!」」

声を揃えたスコルとナギはニナの元に走り寄った。

「ちびっ子嬢ちゃんのは完全に防御特化。お前達みたいなバカはどうせ危ない場所に行くんだろ？ 身軽だからな。抱えられるようにしてあるし、狼のリユックも背負えるようにしてある。ヒュドラとブラックパンサーの素材を使用して黒い装束も登録してあるから確認しろ。形は変わらんけどな」

「ありがとうございます！」

ヒューゴはお礼を言うのとニナを抱き上げた。



「おしよるい？」

「ああ、お揃いだ。似合ってるぞニナ」

「キャツキヤと笑うニナに微笑むとイオリもお礼を言った。

「ありがとうございます。指輪に戦闘服なんて……思いつきませんでした」

「おう、お前らのもセットしてあるからな。あと、手入れと改造を施した。帰って試しな。ヒュー
ゴ！ 最後にお前の武器だ。こっち来い」

さらに奥に行くと、大剣が立てかけられていた。

『『ムーン・ライト』と名付けた。月の光だ。暗闇の中でも光があればお前さんは迷わないし、輝
くだろうて』

震えるヒューゴは、黒光る大剣を手に真剣に振り回し始めた。

「今までの中で一番、手にしっくりきます。いつまでも持っていられそうだ」

ヒューゴの反応に満足すると、カサドはドカッと椅子に座った。

「流石にしんどいな。おい、イオリ、今回も持ってきたんだろうな」

カサドの言っていることを理解したイオリは、魔法の腰バッグから料理を取り出した。

「こっちから、角煮にポテトサラダ、出汁巻卵、味噌汁におかかおにぎりですよ。今日はこのお酒
にしました」

並べられた料理とチャポンつと音のする木筒を見てニンマリすると、カサドは飛び上がった喜

んだ。

「これのために仕事をしてんだよ！ 早速、食わせろ!!」

残りの説明を後回しに、カサドはイオリの料理で英気を養っていった。

「クアアア！ これだよ！ これ！ この1杯が美味いんだ」

△ △ △

「ほう。あのカサドがな……。なかなかいい仕事をしてくれる。それで、イオリ達の準備は整ったと考えていいのか？」

テオルドは執務室にイオリを招き、旅の計画を練っていた。

「はい。バルバルじーさんにも馬車のメンテナンスを見てももらいましたし、いつでも良いですよ」

そんな風に話すイオリを楽しげに見ていたテオルドは、同席していたニコライとヴァルトにも顔を向けると話し始めた。

「それならば、3日後に出発とする。おのおの 各々、それまでに仕事を終わらせろ。残された者に迷惑をかけるなよ」

「はい！」

「午後からは、冒険者ギルドのギルマスが来る。いない間の治安維持を頼むためだ。お前達2人も

出席しなさい。イオリは道中の守りについて騎士団と計画を練ってくれ。ノアも一緒に」

「御意」

「了解です」

本格的に王都への旅へ向けて準備が始まると、イオリは楽しみになってきた。

しかし、テオルドの言葉に冷静さが戻る。

「今回の王都へ行く目的はタヴァロス侯爵の悪事を突き止めることだ。市民が死に物狂いで守る物を貴族の欲で盗まれてたまるか！ それを守るためなら、私は王すら脅しに使うさ。やるぞ、飲まれるなよ」

「はっ！」

気合の入るポーレット公爵家にイオリは気を引き締めたのであった。

話し合いが終わり、イオリがノアと共に騎士団の集まりに行くと大きな声が響いた。

「皆集まれ!!」

号令と共に集った騎士団の前にノアが立った。

「王都への出発は3日後となった。各自、準備すると共に覚悟するように！ それから、今回はイオリ殿も一緒に参る。私達と動き方が異なるが惑わされることなく、己の仕事に殉ぜよ」

「「「「「「はっ!!」」」」」」

騎士団の号令に驚きながらもイオリは会釈をした。

「よろしくお願いしまーす」

そんなイオリに騎士団の面々はニツコリと笑みを見せ、訓練に戻っていった。

「イオリ。騎士団団長を紹介しよう。アイザックだ」

「ポーレット公爵より騎士団団長を拜命しておりますアイザックと申す。此度の旅にはイオリ様もご一緒とのこと、よろしくお願いいたす」

騎士特有の挨拶なのか、ビシッと直立するアイザックにイオリは微笑んだ。

「よろしく願います。大人数での旅なんて初めてのことですし、子どももありますので心配させてしまうこともあるかもしれません。その時はどうぞ、ご容赦を」

アイザックはニカツと笑うと、首を横に振った。

「公爵よりイオリ様達は自由にさせるようにと言いつかつてますし、危ないことなど楽しんでおやりになるでしょうか。大丈夫です。お任せを」

アイザックはノアと同じく公爵の従者だったことがあるのだとか……。

信頼関係がある2人を交え、その後は旅の計画を練り始めた。

△ △ △

「ギゼラ！ ギゼラはどこだ!!」

王都にある煌びやかな屋敷に主人の大きな声が響いていた。

「貴方、何です？ 大きな声を上げて」

「おお、ドーリーー！ ギゼラはどこだ？」

主人は妻を見つけると嬉しそうに肩を掴んだ。

「ギゼラでしたら、部屋で書き物を……」

「お父様？ 呼びました？」

そこに、この屋敷の娘が姿を現した。

大きな体をコルセットにねじ込んだような娘は、口の周りを手で払いながら慌てたようにやってきた。

「貴方、また部屋で砂糖を舐めていたのね？ 端ないからおやめなさい」

「良いじゃない。好きなんだから。それで？ どうしたの？」

「今度、王妃様のお茶会が催されるのは知っているな？」

「もちろんです。ドレスだって注文してますもの」

「それに、ポーレット公爵一家がいらっしゃるそうだ！ 一家総出だそうぞ!!」

主人であるベンネ・タヴァロス侯爵は嬉しそうに娘と妻にそう伝えた。

「なんですって！ オルガ様もいらっしゃるの？ それは……」

「婚約者を見つけない来られるのではないか？ ギゼラ!!」

「こ……こうしてはいられませんわ!! ドレスの作り直しをしなければ!! ニコライ様が私を迎えにきてくださるのに変なドレスを用意するわけにはいかないもの!! 誰か! 誰か! ドレス職人を呼びなさい! 早く!!」

娘のギゼラが大慌てで使用人に命令するのを、タヴァロス侯爵夫婦はにこやかに見つめていた。「ポーレット公爵が来る……。これを逃すものか……」

第2章 新たな旅

3

予定の3日後などすぐに来るもので、イオリは旅の準備に追われていた。今回は家族だけではない。

何よりも、護衛という仕事付きである。

それでも、初めての王都を心から楽しみにしている子ども達の喜ぶ顔を見て、イオリは笑みを絶やさなかった。

「全て積み終わったぞ。教会と冒険者ギルドに行くんだろう? そろそろ出た方が良いんじゃないか?」

「はい! 今行きます」

忘れ物の確認をすると、イオリは公爵達より先に屋敷を出た。城門での合流を約束してある。

イオリは、この日も歩いて街まで下りていった。

「また、旅に出るのね。今回は王都なんて、寂しくなるわ」

「今回は仕事なんだって？　しっかりな。ローズ、大丈夫だ。こいつらの家はポーレットだよ」

「お土産買ってくるね」

「日暮れの暖炉」のダンとローズ夫婦は子ども達を抱きしめると、名残惜し^{なごり}そうに見送った。

冒険者ギルドでは、イオリ達は受付をしてもらう。

ポーレット公爵家から正式に出された護衛依頼を受けるためだ。

「気をつけて行ってきてくださいね」

馴染みの受付嬢、ラーラに全員分のカードを返してもらうと、イオリはニッコリ頷いた。

「おい。ジジイとババアによるしくな」

2階から顔を出しているギルドマスター、コジモにイオリは頷くと手を振った。

「そっくり伝えますよ。行ってきますよ！」

「おいおいおい！」

ギルマスの叫びにクスクス笑いながら子ども達も手を振り、ギルドを後にした。

「本当にそのまま伝えるのか？」

苦笑するヒューゴにイオリは笑いながら頷いた。

「ギルマスの言葉は正確に伝えないと……あはははは」

カッーン！　カッーン！

教会に響く石の床の音を聞きながら、イオリは祭壇の前にやってきた。

「ご出発ですか？」

「はい。また行ってきます。お祈りして良いですか？」

「もちろん」

エドバルドはローブを器用に捌^{はき}きながらイオリに場所を譲った。

目をつぶるイオリはいつもの通り、リュオンに話しかけた。

目を開けたイオリがいたのは、いつものように教会ではないどこかだった。

「お久しぶりです。リュオン様」

「王都へ行きますか？　相沢さん」

「はい。……不安はありますが、この国の中央を見てこようと思います」

「人の悪意の巢窟^{さうくつ}ですよ？　覚悟はありますか？」

「覚悟なんて何もありません。流れに身を任せます。人の心はコントロールなど出来ません」

「そう。人の心はその人の物。しかし、そうさせてくれないのが王都です。素晴らしい国——アー

スガイルにおいても混沌とした人間関係があるのです。貴方らしさを忘れずに……。ゼン……相沢さんを頼みますね」

『任せて！ イオリはボクが守るよ』
優しく手を伸ばすリュオン様にイオリは微笑むと、頭を下げてヒューゴ達が待つ教会に戻った。

「エドバルドさん。それじゃ、行ってきます！」

イオリの笑顔にエドバルドは頷くと、見送るために扉まで一緒に歩いた。

「公爵様と共にお帰りになるのをお待ちしております。どうぞ、道中お気をつけて……」

教会を出て、全ての用事を済ませると気分が晴れたのか、イオリは大きく伸びをして声を出した。
「行くかー。王都！」

『「「「おー」「」」』

気合を入れたイオリ達は城門へ向けて人混みの中に入っていった。

△ △ △

城門に着くと、治安維持隊が忙しくしていた。

「イオリ君！」

隊員のポルトスがにこやかにやってきた。

「おはようございます。皆さん忙しそうですね」

「今日からしばらく公爵家の方々がいらっしやらなくなるからね。警備の配置も変わるんだ。冒険者ギルドとの連携も増えるし、今から大忙しさ」

ポルトスもこれから配置場所に移動するという。

「お疲れ様です。しばらく留守にしますけど、よろしくお願いします」

「うん。気をつけて行ってくれ。公爵様を頼んだよ。それじゃ！」

そう言うと同僚と一緒に走っていくポルトスに、イオリ達は手を振った。

城門の外に出ると、アウラは大きくなり嬉しそうに走り出した。

準備運動のごとく走るアウラを見て目を細めると、イオリは腰バッグから馬車を取り出した。

「さあ、みんな乗りな。ゼンはどうする？」

『少しアウラと走るよ！』

大きく伸びをしながらゼンは楽しそうに答えた。

アウラも満足したのか、戻ってくるとイオリに鼻を擦りつけ甘える。

「また頼むよ。アウラが頼りだ」

「任せて」と言うように、首を縦に振るアウラは馬車の前方に移動し、大人しくハーネスをつけら

れた。

「俺が御者席に座ろう。魔獣は頼むよ」

ヒューゴの言葉にイオリは頷いた。

「了解です。お願いします」

馬車に乗り込んだ子ども達は、慣れたように自分達の居場所を作り上げる。

イオリも馬車に乗り込むと、二ナが洗淨魔法をかけてきた。

「足ばっちい」

「ふふふ。ありがとう。助かったよ」

「うん！」

二ナは満足そうに頷くと、イオリの足の間にチョコンと座った。

そんな時だった。

ガランッ！ ガランッ！ ガランッ！ ガランッ！

大きな鐘の音が鳴り響き、街中から唸りを上げたように歓声が上がった。

二ナは驚いたようにイオリにしがみつくと、双子やナギと共に恐る恐る馬車の窓から外を覗き込んだ。

「大丈夫。テオさん達が出発したんだよ。俺達も行くから、舌噛まないようにね」

「[[[はーん]]]」

イオリの合図を確認したヒューゴは、馬車をゆっくり走らせた。

ゼンはワクワクした様子で馬車と並走すると、耳をピクピクつと動かして振り向く。

オオオオオオオオオオオオオオオオ！！

歓声と共に開いた大きな門から、真っ白に輝く騎士団が馬で列を作って走り出てきた。

興奮したゼンは騎士団の先頭を走り、なぜか先導する。

イオリは苦笑しながらヒューゴにスピードを上げるように頼むと、騎士団の真ん中にいたポレット公爵一家の馬車に並走した。

馬車から顔を出して手を振っているオルガとヴァルトに、子ども達もブンブンと手を振った。

「あっ！ 見て！！ トウーレ達は馬に乗ってるよ！」

ノア、エドガー、フラン、そしてトウーレとマルクルは、騎士団とは別に馬車を守るように馬を走らせていた。

「ゼン！！ 戻っておいで！」

イオリの声に反応したゼンは、騎士団から離れてイオリ達の馬車までやってくると飛び乗った。

『あー。楽しかった！！ 大勢の前を走ると体が震えるくらい振動したよ。おもしろーい！！』

そんなゼンが撒き散らした汚れに眉をひそめた二ナは、急いで洗淨魔法をかけて――。

「ゼンちゃん、バッチい！」

そう叫び、ゼンをシュンとさせていた。

王都は面倒な場所であることは否めないが、久々に兄弟や友人と会えるのに心躍らせているのだ。

「貴方、先ほど見ました？ ゼンちゃんの素早いこと」

「ああ、見たぞ。あの子は本当に賢い子だ。見てご覧。今はあんなに安心した顔で目をつぶっている」

公爵家の兄弟は両親が仲良く微笑み合っているのを見るのが好きだった。

だからこそ、王都で待っているであろうタヴァロス侯爵との決着に決心を固める。

「あー。面倒臭い……」

いや、ニコライだけは自分の不運を恨まずにはいられないようだった。

「……めでたし、めでたし。はい！ 終わり」

イオリは二ナにせがまれてお伽話とぎばなしを聞かせていた。

手からおむすびが転がって、ネズミさんがいる穴に落ちると、おむすびのお礼に金銀財宝をもらったお爺さん。

そのお爺さんに嫉妬した別のお爺さんが、おむすびを蹴ってネズミの穴にわざとおにぎりを落とし、金銀をもらおうと襲ったものの逆にネズミさんに噛みつかれるという話だ。

「欲張ってはいけないよって話だよ。それに、食べ物も大切にしないとね」

二ナはネズミさんを襲ったおじいさんに怒っていたが、ネズミさんが反撃したら大喜びだった。

一緒に聞いていた双子とナギもニツコリと頷いた。

『『強欲は身を滅ぼす』って俺のじーちゃんはやったよ』

△ △ △

朝にポーレットを出発した一行は街道を抜けて、王都への道を真っ直ぐに進んでいた。

魔獣が出没し、騎士団が気を引き締める場面も度々あったが、公爵家と並走している馬車からの攻撃で次々と倒されていった。

「そろそろ一度、休憩を入れよう」

馬車に走り寄ってきたノアにヒューゴは頷くと、騎士団が先行して安全を確保した水辺で馬車を停めた。

「若い頃と違って腰にくるな」

テオルドは大きく腕を伸ばしストレッチをした。

「あら、私はまだ若くてよ」

筆頭侍女頭モーナに手を引かれながら馬車から降りてきたオルガは、そんな夫を見て微笑んだ。

「父上も母上も無理なさらないでください。昔と違うのだから……」

「ヴァルト!!」